

## 資料

## 大学生の孫からみた祖父母の機能と祖父母イメージ

福江里美\*<sup>1</sup> 荒井佐和子\*<sup>2</sup> 福岡欣治\*<sup>2</sup>

## 要 約

本研究では、青年期後期の孫に対する祖父母の機能、現在の祖父母と孫の関係、孫の抱く祖父母イメージの相互関係について検討した。調査対象者は大学2年生の男女であり、有効回答者は158名（男子39名、女子119名）であった。回答者は、自身にとって最も関わりの深い、あるいは深かったと感じる1名の祖父または祖母を挙げ、その人と自分との関係についての質問に答えるよう求められた。典型的に挙げられた祖父母は、「父方または母方の、別居で存命の祖母」であった。使用した各尺度の因子構造を確認のうえ、下位尺度ごとの因子得点を算出した。これらの得点と回答者あるいは祖父母の属性との有意な関係はほとんど認められなかった。相関分析の結果、変数間に有意な関連性が数多く認められた。「気疲れ」が少なく「関与」の多い関係ほど、祖父母の機能が良好であると評価されていた。また、祖父母のイメージは、導きや気遣いの機能がよく発揮されている祖父母において、および「気疲れ」や「葛藤」の少ない関係性において、より良好であった。これらの結果は、青年期の孫において、祖父母の機能、祖父母との現在の関係性、祖父母に対するイメージが相互に関連していることを示す。どのような関係性の祖父母によってどのような機能が発揮されるか、また、どのような関係性や機能を果たす祖父母に対して良好なイメージをもつのか、という点から解釈ができると思われる。

## 1. 緒言

## 1.1 研究の背景

わが国では高齢化が進展する一方、三世同居率は低下しており<sup>1)</sup>、祖父母と孫との関係は希薄化している。しかし、祖父母と孫との関わりは、双方にとって重要であると考えられる。エリクソン<sup>2)</sup>は発達の相互性と世代性を唱え、異世代の関わりが相互の発達を促し、青年期においても時間的展望やライフサイクル継承の感覚に資するとしている。とくに後者すなわち祖父母と孫との関係が青年期の発達に及ぼす影響に関しては、先行研究の蓄積は少ないものの<sup>3)</sup>、以前からその重要性がたびたび指摘されてきた。たとえばBaranowski<sup>4)</sup>は、祖父母との関係は青年期におけるアイデンティティの発達や親子関係、加齢や高齢者に対する態度に影響を及ぼすことを主張している。また、支援的な祖父母との関係が青年期の心理的健康（抑うつや低さや自尊心、自己受容など）と関連する<sup>5,6)</sup>ことも、散発的ではあるが国内外の研究で報告されてきている。このよう

な社会的状況および研究の動向から、祖父母との関係は青年期の孫にとって今なお重要性をもつものであり、また同居率の低下をふまえ、関係の質的側面にもいっそう注目して研究を進めることが有意義であると考えられる。

## 1.2 関連する先行研究の動向

## 1.2.1 孫にとっての祖父母の機能

青年期の孫からみた祖父母の役割や機能を取り上げた研究はいくつかある。たとえば中・高・大学生を対象とした田畑ら<sup>7)</sup>の「孫・祖父母関係評価尺度」の「孫版」では、「存在受容」、「日常的・情緒的援助」、「時間的展望促進」、「世代継承性促進」の4因子を、祖父・祖母に共通の機能として抽出している。ただし、田畑ら<sup>7)</sup>の因子分析結果を示すTable 1 (p.377)を精査すると、複数の因子に高い負荷量を示す項目が数多く含まれており、その因子構造は必ずしも明瞭とは言えない。同様の因子構造の不明瞭さは、沖縄県の高校生を対象とした調査で「語り部・伝統文化伝承」、「安全基地」、「人生観・死生観促進」の3

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻

\*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(連絡先) 福江里美 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : w5218005@kwmw.jp

機能を抽出した前原ら<sup>8)</sup>でもみられる。なお、森下と上田<sup>3)</sup>は田畑ら<sup>7)</sup>の尺度を参考に2つの逆転項目を加え評定方法を変更して使用し、田畑ら<sup>7)</sup>とは異なる「心の支え」「人生の指針」「理解共感」の3因子を抽出している。このように、祖父母の機能それ自体についても確たる知見が提供されているとは言い難い。

### 1.2.2 孫と祖父母の両義的な関係

祖父母の機能とは異なる捉え方として、杉井<sup>9)</sup>は「世代間交流」の視点から「祖父母と孫の関係」を測定している。その中で杉井<sup>9)</sup>は、「関係性の良否及びその存在意義」(p.178)として、祖父母との関係をネガティブな次元も含む「両義的なもの」として把握するという方向性を示している。杉井<sup>9)</sup>の用いた項目は多くが田畑ら<sup>7)</sup>の検討結果を元になっているが、新たに付け加えられた項目もあり、そこには「祖父(祖母)を相手にすると、疲れると感じる」「祖父(祖母)は、わたしをかわいがってくれる」など、現在の関係における肯定・否定の両側面を含む。杉井<sup>9)</sup>は各項目を個別にのみ扱い、それ自体の構造や機能との関連は検討していない。しかし、このような関係性の把握を祖父母の機能と並行しておこなうことは、祖父母の機能がどのような特徴をもつ関係で発揮されるかを検討できるようになるという点で、検討のための有用な切り口を提供するアプローチになり得ると考えられる。

### 1.2.3 祖父母に対して孫が抱くイメージ

高齢者観や高齢者イメージの研究(例えば保坂と袖井<sup>10)</sup>)にみられるように、孫は祖父母に対して一定のイメージを抱く。一般的な高齢者イメージと同様、祖父母のイメージは接触や交流の経験によって左右されると考えられる。杉井<sup>9)</sup>は祖父母イメージをSD法で測定し、小・中・高・大学生による評定を比較している。他方、祖父母へのイメージは、どのような機能を果たしている祖父母か、また祖父母と現在どのような関係性にあるかによっても異なってくると考えられる。このような検討は、従来の研究ではおこなわれていないが、祖父母へのイメージと共変関係にある新たな心理学的変数を特定する試みの一つとして位置づけることができる。杉井<sup>9)</sup>は中高生でいったんネガティブに変化した祖父母イメージが大学生では再びポジティブに変化することを報告しているが、このような変化を支える祖父母側および大学生側の要因を検討することにもつながる可能性があり、一定の意義を見出すことができると考えられる。

### 1.3 本研究の問題意識と目的

以上の問題意識をふまえ、本研究では孫である青

年期の大学生からみた祖父母の機能、祖父母との現在の関係性、祖父母に対するイメージを杉井<sup>9)</sup>に準じて測定し、因子構造を確認のうえ、これら相互の関連性について検討する。すでに述べてきたとおり、青年期の孫と祖父母との関係、とりわけ孫からみた祖父母との関係がもつ重要性に関しては、従来から指摘されてきてはいるものの<sup>3,9)</sup>、研究は豊富に蓄積されているとは言いがたい。それゆえ本研究は探索的な性質をもつものであるが、祖父母の機能、祖父母との関係性、祖父母に対するイメージは、相互に密接な関連をもつものと考えられる。それが果たしてどのようなものであるのか、大学生を対象とした一サンプルにおける結果を提示することが、本研究の目的である。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

岡山県内の大学2年生177名を対象に調査を実施した。一部の質問に記入漏れがあったもの等を除く有効回答は158名(男子39名、女子119名)であった。回答者の平均年齢は、19.54歳(SD=0.51)であった。

### 2.2 測定内容

#### 2.2.1 最も関わりの深い祖父母

回答者にとって最も関わりの深い、あるいは深かったと感じている1名を「父方の祖母」「父方の祖父」「母方の祖母」「母方の祖父」の中から選択させ、その人物は存命か否か、および同居の有無について尋ねた。

#### 2.2.2 祖父母の果たす機能

田畑ら<sup>7)</sup>の孫・祖父母関係評価尺度(孫版)を杉井<sup>9)</sup>が一部改変した29項目を使用した。項目内容は「祖父(祖母)は、病気やけがのとき世話をしてくれる」「祖父(祖母)は、わたしの代わりにちょっとした用事をしてくれる」「祖父(祖母)の姿から、自分が年をとったとき、どうなりたいか想像することがある」などであった。先行研究と同様に、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法で回答を求めた。なお、以下では適宜「祖父母の機能」と記載する。

#### 2.2.3 祖父母との関係性

孫一親一祖父母の三者関係や否定的な側面を含めて把握するために杉井<sup>9)</sup>が用いた10項目を使用した。項目内容は「祖父(祖母)を相手にすると、疲れると感じる」「祖父(祖母)は、口を聞いてくれないことがある」などであった。先行研究と同様に、「祖父母の果たす機能」と同じ3件法で回答を求めた。

#### 2.2.4 祖父母イメージ

杉井<sup>9)</sup>によって用いられたSD法形式による17項目の尺度を使用した。「冷たい—あたたかい」「悲し

い—うれしい」「正しくない—正しい」など対の意味の単語が両極に並べられており、自分の選択した人物に対してどのような印象を持っているか、自分自身の感じ方にもっとも近いものを5段階（両極に「とても」、中央に「どちらでもない」、両者の間に「どちらかといえば」を配置）の中から選択するものであった。

### 2.2.5 個人属性

回答者の個人属性として、回答者自身の所属学科、学年、年齢、性別をたずねた。

### 2.3 手続き

授業担当教員の了解を得て、2017年10月に、講義終了後に質問紙調査を実施した。最初に第一筆者が調査の趣旨を説明し、同意が得られた人に対して、数名の協力者ととも調査票を個別に配布した。回答のペースは任意とし、終了後その場で回収した。所要時間は15分程度であった。

### 2.4 倫理的配慮

調査への協力は自由意志にもとづくものとし、本調査の目的、調査で得られたデータは統計的に処理され個人が特定されることはないこと、研究以外の目的でデータが使用されることは一切ないこと等を口頭および調査票冒頭の教示文で説明した。なお、本研究は公益社団法人日本心理学会が定める「公益社団法人日本心理学会倫理規程（第3版）」に準拠して作成された川崎医療福祉大学臨床心理学科「卒業研究に関する倫理指針」に沿って、指導教員の指導と監督のもとで実施した。

## 3. 結果

### 3.1 最も関わりの深い祖父母の属性

自分にとって最も関わりの深い祖父母として挙げられた人の属性を表1に示す。典型的に挙げられた祖父母は、「父方または母方の、別居で存命の祖母」であった。表1に示す4つの属性について、回答者の

性別との関連はいずれも有意ではなかった。「祖父／祖母」と他の3属性との間では、「存命／死別」との関連が有意であり ( $\chi^2(1) = 8.01, p < .01$ )、祖母について存命の人が多く挙げられていた（死別者は祖父母同数であった）。

### 3.2 各変数の内容集約と尺度構成

それぞれについて、主成分分解・プロマックス回転の因子分析により内容の集約と尺度構成を試みた。

#### 3.2.1 祖父母の果たす機能

3件法の回答に1～3点を付与して分析した。固有値1以上の因子は8つであったが、3～8因子構造のいずれも田畑ら<sup>7)</sup>との十分な対応関係はみられなかった。5因子解でもっとも明瞭で解釈しやすい因子構造が認められ（表2）、項目内容からそれぞれを「導き」「気遣い」「世代的つながり」「世話」「金銭的援助」と命名した。「導き」は、祖父母の姿を見て、孫が自分自身の生き方の参考にすること、「気遣い」は、祖父母が自分のことを気遣ってくれていると孫が実感すること、「世代的つながり」は、祖父母の昔話や祖父母の存在そのものから、孫が世代的なつながりを感じることに、「世話」は、祖父母が両親や孫自身の都合が悪いとき代わりに孫の世話をしてくれること、「金銭的援助」は、金銭的な面において孫が祖父母から援助を受けることを表す。

#### 3.2.2 祖父母との関係性

3件法の回答に1～3点を付与して分析した。固有値1以上の因子は4つであり、3因子解で最も明瞭な因子構造が認められた。項目内容と後述する他変数との相関関係を加味し（表3）、順に「気疲れ」「葛藤」「関与」を表すものと解釈した。「気疲れ」は祖父母との関わりにおける疲労感やわずらわしさを、「葛藤」は同じく緊張感や疎外感を、「関与」は両親との三者関係もふまえつつ祖父母を重要なものとみなす意識を反映する。

表1 最も関わりの深い祖父母の属性

対象者属性	カテゴリー	人数	%
祖父／祖母	祖父	35	22.2
	祖母	123	77.8
父方／母方	父方	62	39.2
	母方	96	60.8
同居／別居	同居	36	22.8
	別居	122	77.2
存命／死別	存命	142	89.9
	死別	16	10.1
	合計	158	100.0



表3 祖父母との関係性についての因子分析結果

因子名	項目内容	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
気 疲 れ	祖父（祖母）を相手にすると、疲れると感じる	.75	-.02	.16	.57
	祖父（祖母）がいると、わずらわしいと思う	.73	.15	.08	.64
	祖父（祖母）が一緒にいると、家庭の雰囲気が明るくなる	-.67	.05	.33	.54
	祖父（祖母）は、日々の暮らしの中で、わたしを必要とってくれている	-.51	-.01	.39	.42
葛 藤	祖父（祖母）は、口を利いてくれないことがある	.08	.72	.17	.60
	祖父（祖母）から、親の悪口はあまり聞きたくないと思う	.37	-.71	.27	.53
	祖父（祖母）は、わたしをかわいがってくれる	-.24	-.61	.11	.54
	祖父（祖母）と、よくけんかをする	.23	.50	.23	.43
関 与	祖父（祖母）と、父親と母親がぎくしゃくした時など、わたしがなんとかしなければと思う	-.11	.01	.81	.66
	父方、母方の祖父、祖母のどちらがより好きとか、つい比較してしまう	.05	.02	.74	.56
	初期の固有値	2.68	1.68	1.12	
	固有値寄与率（%）	26.84	16.76	11.20	
	回転後の負荷量平方和	2.33	1.98	1.67	
	因子間相関		.33	-.01	.01

### 3.2.3 祖父母イメージ

5段階の回答に対して1~5点を付与して分析した。固有値1以上の因子は4つであったが明瞭な因子構造は得られず、2因子解がもっとも簡潔で解釈しやすい結果であった(表4)。項目内容からそれぞれ「評価」「活動性」と命名した。それぞれ祖父母に対する好印象、およびアクティブなイメージを反映する。

### 3.3 因子得点の算出と属性による差異の検討

祖父母の機能、祖父母との関係性、祖父母イメージのそれぞれについて、因子分析により算出される因子得点（回答者全体において平均0、標準偏差1に標準化された値）を用い、回答者の性別および挙げられた祖父母の属性（表1記載の4属性）による違いを検討した（表5）。対応のないt検定の結果、回答者の性別、父方か母方か、存命か死別かの3つでは、いずれの因子得点にも有意な差異は認められなかった。また他の2つの属性についても、5%ないしそれ以上の水準での有意差がみられたのは、「祖父／祖母」の属性における祖父母の機能の「世話」（祖父<祖母；祖父 M=-0.41, SD=1.19, 別居 M=0.12, SD=0.91）と祖父母との関係性の「関与」（祖父<祖母；祖父 M=-0.40 SD=0.95, 別居 M=0.12, SD=0.99）、そして「同居／別居」の属性における祖父母イメージの「評価」（同居<別居；同居 M=

-0.30, SD=1.18, 別居 M=0.09, SD=0.93）のみであった（表5）。なお、「祖父／祖母」と回答者の性別および祖父母に関する他の3属性（「父方／母方」「存命／死別」「同居・別居」）の組み合わせによる2要因分散分析もおこなったが、すべての変数について有意な交互作用は認められなかった。

### 3.4 祖父母の機能、祖父母との関係性、祖父母イメージの相互関係

因子得点間の関連性を検討した。回答者の性別や挙げられた人が祖母か祖父か等を統制した偏相関係数も検討したが、結果は同様であったため、ここではピアソンの単相関係数を示す（表6）。

#### 3.4.1 「祖父母の果たす機能」と「祖父母との関係性」の関係

祖父母の果たす機能（5因子）と祖父母との関係性（3因子）との相関関係は、表6中段に示されている。これについて後者を起点に、つまり「どのような関係性とどのような機能の間に関連があるか」という観点からみると、まず祖父母との関係性の「気疲れ」は、祖父母の果たす機能の「導き」「気遣い」とは負の相関が、「金銭的援助」とは低い負の相関が認められたが、「世代的つながり」「世話」とはほとんど相関が認められなかった。また、祖父母との関係性の「葛藤」は、祖父母の果たす機能の「気遣

表4 祖父母イメージの因子分析結果

因子名	項目内容	因子1	因子2	共通性
評価	悲しい—うれしい	.93	-.12	.79
	悪い—良い	.87	.02	.78
	ひどい—すばらしい	.86	-.03	.73
	話にくい—話しやすい	.86	-.15	.66
	冷たい—あたたかい	.82	-.35	.54
	みにくい—美しい	.73	.09	.60
	きたない—きれい	.72	.12	.60
	邪魔をする—手伝ってくれる	.71	.11	.59
	正しくない—正しい	.70	.14	.59
だらしがない—きちんとした	.60	.25	.54	
活動性	弱い—強い	-.09	.87	.70
	遅い—速い	-.03	.75	.55
	にぶい—すどい	-.07	.68	.43
	小さい—大きい	-.02	.63	.38
	ひまそう—忙しそう	-.07	.60	.33
	おろかな—かしこい	.25	.58	.52
	病気がちな—元気な	.39	.40	.44
初期の固有値		7.40	2.35	
固有値寄与率 (%)		43.55	13.84	
回転後の負荷量平方和		7.04	4.50	
因子間相関			.42	

表5 属性による差異の検討結果

変数・下位尺度	回答者性別	祖父/祖母	父方/母方	同居/別居	存命/死別
祖父母の果たす機能					
導き	0.76	-0.39	-0.50	-0.34	-0.05
気遣い	1.25	-0.25	-0.07	-1.10	0.94
世代的つながり	0.53	0.22	0.13	0.27	0.86
世話	1.32	<b>-2.41*</b>	0.40	0.82	1.16
会話的援助	-1.05	0.32	-0.80	0.21	-0.03
祖父母との関係性					
気疲れ	-1.11	0.13	0.20	1.68	0.03
葛藤	0.17	-0.71	0.09	1.71	-0.70
関与	-1.37	<b>-2.77**</b>	-1.37	0.98	1.38
祖父母のイメージ					
評価	0.60	-1.76	0.72	<b>-2.06*</b>	0.42
活動性	0.93	1.00	1.05	-0.47	-0.30

数値は t 値を示す (df=156, ただし分散が異なる場合はWelchの検定をおこなった)

\*\*p<.01 \*p<.05

い」とは低い負の相関が認められたが、「金銭的援助」とはほとんど相関がなく、「導き」「世代的つながり」「世話」との相関は有意でなかった。そして、祖父母との関係性の「関与」は、祖父母の果たす機能の「金銭的援助」と正の相関が、「導き」「気遣い」「世代的つながり」「世話」とは低い正の相関が認められた。

### 3.4.2 「祖父母の果たす機能」と「祖父母イメージ」の関係

祖父母の果たす機能(5因子)と祖父母イメージ(2因子)との相関関係は、表6の下段左側に示されている。これについて前者を起点に、つまり「どのような機能とどのようなイメージが関連しているか」という観点からみると、まず祖父母の果たす機能の

表6 因子得点間の相関係数

変数・下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
祖父母の果たす機能									
導き	①	—							
気遣い	②	.48 ***	—						
世代的つながり	③	.47 ***	.30 ***	—					
世話	④	.24 **	.18 *	.20 *	—				
金銭的援助	⑤	.38 ***	.19 *	.26 **	.19 *	—			
祖父母との関係性									
気疲れ	⑥	-.62 ***	-.53 ***	-.18 *	-.17 *	-.27 **	—		
葛藤	⑦	-.15	-.27 **	-.05	-.01	-.17 *	.33 ***	—	
関与	⑧	.40 ***	.25 **	.32 ***	.22 **	.41 ***	-.01	.01	—
祖父母のイメージ									
評価	⑨	.63 ***	.59 ***	.28 ***	.15	.19 *	-.57 ***	-.31 ***	.21**
活動性	⑩	.35 ***	.11	.25 **	.08	.09	-.15	-.09	.08

\*\*\* p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

「導き」は、祖父母イメージの「評価」とは正の相関が、「活動性」とは低い正の相関が認められた。祖父母の果たす機能の「気遣い」と祖父母イメージの「評価」とは正の相関が認められたが、「活動性」との相関は有意でなかった。祖父母の果たす機能の「世代的つながり」は、祖父母イメージの「評価」「活動性」とは低い正の相関が認められた。祖父母の果たす機能の「世話」と祖父母イメージの「評価」「活動性」との相関は有意でなかった。祖父母の果たす機能の「金銭的援助」と祖父母イメージの「評価」はほとんど相関が認められず、「活動性」との相関は有意ではなかった。

### 3.4.3 「祖父母との関係性」と「祖父母イメージ」の関係

祖父母との関係性（3因子）と祖父母イメージ（2因子）との相関関係は、表6の下段右側に示されている。これについて前者を起点に、つまり「どのような関係性とどのようなイメージが関連しているか」という観点からみると、まず祖父母との関係性の「気疲れ」は祖父母イメージの「評価」と負の相関、祖父母との関係性の「葛藤」は祖父母イメージの「評価」と低い負の相関、祖父母との関係性の「関与」は祖父母イメージの「評価」と低い正の相関が認められた。他方、祖父母との関係性の3因子と祖父母イメージの「活動性」との相関は、いずれも有意ではなかった。

## 4. 考察

本研究では、大学生からみた祖父母の機能、祖父

母との現在の関係性、祖父母に対するイメージを測定し、因子構造を確認のうえ、これら相互の関連性について、探索的に検討した。多くの有意な関連性が認められ、これらが互いに密接に関連している、という想定に沿った結果が得られたと考えられる。以下、それぞれの内容に沿って考察する。

### 4.1 孫にとっての祖父母の機能

本研究において使用した「祖父母の果たす機能」の項目は、田畑ら<sup>7)</sup>の孫・祖父母関係評価尺度（孫版）を杉井<sup>9)</sup>が一部改変したものであるが、因子分析の結果「導き」「気遣い」「世代的つながり」「世話」「金銭的援助」の5因子に分類された。田畑ら<sup>7)</sup>は、祖父母が孫に果たす役割として「存在受容」「日常的・情緒的援助」「時間的展望促進」「世代継承性促進」の4因子を抽出しているが、これと共通する部分はあるものの同一ではなかった。また、今回の因子分析結果も、細かく見ると田畑ら<sup>7)</sup>と同様にすべての項目が明瞭な因子構造を示しているわけではない。田畑ら<sup>7)</sup>の尺度は片山<sup>11)</sup>でも紹介されるなどよく知られた尺度であるが、祖父母の機能をどのように測定するかについては、今後、尺度構成あるいは項目内容の点から改めて検討し直す必要があるかもしれない。

なお、今回は、「関わりの深い（深かった）人物」として祖父を選んだ人物と祖母を選んだ人物の人数差が大きかったこともあり、田畑ら<sup>7)</sup>とは違い、祖父と祖母について分けることなく分析を行った。このことが、どの程度今回の結果に影響しているかを厳密に評価することはできない。ただし、抽出され

た因子はそれぞれ解釈可能なものであり、祖父母に共通して考察することのできる機能であると考えられる。

#### 4.2 孫と祖父母の両義的な関係

本研究では、杉井<sup>9)</sup>に沿って孫と祖父母の両義的な関係についての項目を使用した。そして、新たに因子分析による尺度構成を試み、「気疲れ」「葛藤」「関与」の3因子を抽出した。「気疲れ」と「葛藤」はそれぞれ関係の肯定的な性質と否定的な性質を、「関与」は孫からみた祖父母の存在の重要性を反映すると考えられる。

既述のように、祖父母と孫の関係性の把握は、祖父母の機能がどのような特徴をもつ関係で発揮されるかを検討しうる点で、有用であると考えられる。祖父母との関係が孫にとって重要であるとしても、すべての祖父母—孫関係が良好なものであるとは限らない。「機能」以外の観点からも祖父母と孫の関わりを捉えることにより、祖父母と孫の双方に対する両者の関係の意義を、より深く検討することができると考えられる。実際、「気疲れ」と「関与」は祖父母の機能に関する5因子と有意な相関を示した（前者は正、後者は負）。これは本研究の視点が妥当であったことを示す。ただし、「葛藤」は祖父母の機能のうち3因子とは有意な相関を示さなかった。葛藤のある関係であっても必ずしも機能が損なわれるわけではない、という点は、孫からみた祖父母の重要性という視点から、さらなる検討に値すると考えられる。もちろん、今回使用した10項目で祖父母と孫の関係性のすべてを評価できるわけではなく、今回の検討はその端緒として位置づけられるべきであろう。

個別の関連性について言えば、祖父母との関係性の「関与」は、祖父母の果たす機能の「金銭的援助」と正の相関が認められた。祖父母と両親がぎくしゃくしたときに自分が何とかしなければいけないと考えてしまうことや、父方と母方どちらの祖父母が好きであるのかと比較してしまうということは、孫はそれほど祖父母に対して好意的な感情を持っているということに繋がっているのではないかと。また、祖父母側も、孫に対して好意的な感情を持っているからこそ積極的に金銭面での援助をするなどの積極的なサポートを行ってくれるのではないかと考えられる。また、祖父母の果たす機能の「導き」は、祖父母イメージの「評価」と正の相関、祖父母の果たす機能の「気遣い」は祖父母イメージの「評価」と正の相関が認められた。祖父母が自分のことを気遣ってくれていると実感している孫や、祖父母の姿を見て、孫が自分自身の生き方の参考にする孫は、祖父

母に対する評価が高くなると言える。祖父母との関係性の「気疲れ」は、祖父母の果たす機能の「導き」「気遣い」と負の相関が認められたことから、祖父母のことをわずらわしい、一緒にいて疲れると感じている孫は、祖父母の姿を見ても自身の生き方の参考にしようとは思わない、対象者（孫）自身のことを気遣ってくれていない、などと感じているようである。同じく、祖父母との関係性の「気疲れ」については、祖父母イメージの「評価」とも負の相関が認められたことから、祖父母のことをわずらわしい、一緒にいて疲れると感じている孫は、祖父母に対する評価が下がると考えられる。

#### 4.3 祖父母に対して孫が抱くイメージ

本研究で使用した祖父母イメージの項目は、因子分析の結果「評価」「活動性」に分類された。これらの因子は、たとえば大谷と松木<sup>12)</sup>においても抽出されており、従来の老人イメージに関する研究の結果と完全に一致しているわけではないが、一定の共通性をもつといえる。

本研究において、祖父母イメージの「評価」は、祖父母の機能および祖父母との関係性に関するほとんどの因子と有意な相関を示した。このことは、本研究の「どのような機能を果たす祖父母か、また現在どのような関係性にあるかによって、祖父母へのイメージは異なってくる」という問題意識が妥当であったことを示す。なお、「活動性」については、祖父母の機能における「導き」および「世代的つながり」と正の関連性を示したが、他とは有意な関係を示さなかった。このことは、必ずしもアクティブではない高齢者であっても果たしうる機能があることを意味しており、興味深い知見の一部と考えられる。

なお、本研究では、祖父母との同居／別居によって「評価」のイメージが異なり、同居の方が、得点が低かった。祖父母と同居しており関わる時間が長いからといって、必ずしも祖父母に対するイメージが肯定的なものになるとは限らないようである。村山<sup>13)</sup>は、高齢者イメージについて、祖父母と同居している人物など、交流のあり方が親密な者であるほど高齢者イメージが肯定的なものになるという仮説を立て調査を行ったが、仮説は支持されなかった。この結果について村山<sup>13)</sup>は、「同居における過度に親密な関係では、ストレスや葛藤といった負の影響が生じてしまう可能性もあると考えられる」と述べている。本研究では祖父母との関係性の3因子に同居／別居による有意差がみられていないため、村山<sup>13)</sup>の考察をそのまま当てはめることは難しい。しかし、祖父母と同居している人物に関しては、双方が干渉



しすぎない程度に、適度な関わり方をすることが、祖父母と孫双方にとって良い関係をもたらすと考えられる。

#### 4.4 終わりに——祖父母の生死が孫に与える影響

本研究においては、祖父母の機能、祖父母との関係性、祖父母イメージについて、回答者および「もっとも関わりの深い」祖父母の属性との違いを検討したが、有意な結果は僅かであった。特に、挙げられた祖父母が存命であるか否かによる違いはみられなかった。これは、回答時点では死別していても「関わりのあった」ときの祖父母が、現在も存命である祖父母と同等の存在であったことを意味している。

冒頭でも記述したように、エリクソン<sup>2)</sup>は、異世代の関わりが相互の発達を促し、青年期においても時間的展望やライフサイクル継承の感覚に資すると述べている。先行研究では、「関わりの深い（深かった）祖父母」として、亡くなった祖父母が選択肢に含まれているものはほとんどない。しかし、祖父母

が既に亡くなっている孫は、祖父母が存命している孫と比較しても、亡くなった祖父母を思い浮かべ、命の大切さ、自身の生き方等について考える機会が多いのではないかと考えられる。今回の場合、関わりが深かった人物としてすでに亡くなった祖父母を選んだ回答者は158名中16名であった。しかし、少数ではあっても、このような祖父母を選ぶ回答者にとっては特に、祖父母は死後も孫の発達に影響を及ぼす可能性があると考えられる。このような、存命の祖父母が実際の関わりを通して孫に影響する部分と、祖父母との直接の関わりが失われた後にもなお孫に影響を及ぼし続ける部分の両方を、「孫に対する祖父母の発達の意義」として検討することができれば、より一層有意義な知見が得られるのではないかと考えられる。つまり、たとえ自分にとって関わりの深かった祖父母が既に亡くなっていたとしても、心理的には孫に一定の影響を与え続ける場合があることを表す可能性がある。

#### 謝 辞

本研究は、第一筆者による平成29年度川崎医療福祉大学卒業論文のデータを新たな観点から再分析し、全面的に書き改めたものです。調査の実施にあたり御協力を下さった臨床心理学の先生方、ならびに多くの回答者の皆様に、深く感謝申し上げます。なお、本論文の内容は岡山心理学会第66回大会（2018年12月）において発表されています。

#### 文 献

- 1) 内閣府：平成30年版高齢社会白書（全体版）（PDF版）。  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html), 2018. (2019年6月5日確認)
- 2) E.H. エリクソン著、村瀬孝雄、近藤邦夫（訳）：ライフサイクル、その完結。みすず書房、東京、1989.
- 3) 森下正康、上田佳乃：祖父母との関係が女子大学生の自尊感情と自己受容に与える影響。京都女子大学発達教育学部紀要, 12, 135-144, 2016.
- 4) Baranowski MD : Grandparent-adolescent relations: Beyond the nuclear family. *Adolescence*, 17, 575-584, 1982.
- 5) Ruiz SA and Silverstein M : Relationships with grandparents and the emotional well-being of late adolescent and young adult grandchildren. *Journal of Social Issues*, 63(4), 793-808, 2007.
- 6) 關戸啓子：祖父母との人間関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌, 11(1), 49-55, 2001
- 7) 田畑治、星野和実、佐藤朗子、坪井さとみ、橋本剛、遠藤英俊：青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成。心理学研究, 67(5), 375-381, 1996.
- 8) 前原武子、金城郁子、稲谷ふみ枝：続柄の違う祖父母と孫の関係。教育心理学研究, 48(2), 120-127, 2000.
- 9) 杉井潤子：現代における祖父母と孫との関係性—孫の成長と祖父母の加齢による変化と連続性—。文部科学省研究費補助金研究成果報告書平成13年度～平成14年度科学基盤研究（C）（2）課題番号13680116, 2003.
- 10) 保坂久美子、袖井孝子：大学生の老人イメージ—SD法による分析—。社会老年学, 27, 22-33, 1988.
- 11) 片山美由紀：孫—祖父母関係評価尺度。吉田富二雄編、心理測定尺度集Ⅱ、人間と社会のつながりをとらえる＜対人関係、価値観＞、サイエンス社、東京、159-165, 2001.
- 12) 大谷英子、松本光子：老人イメージと形成要因に関する調査研究—（1）大学生の老人イメージと生活経験の関連—。日本看護研究学会雑誌, 18(4), 25-38, 1995.
- 13) 村山陽：高齢者との交流が子どもに及ぼす影響。社会心理学研究, 25(1), 1-10, 2009.

（令和元年6月5日受理）

## Grandparent's Functions and Images for Late Adolescents as Grandchildren

Satomi FUKUE, Sawako ARAI and Yoshiharu FUKUOKA

(Accepted Jun. 5, 2019)

Key words : grandparents, grandchildren, late adolescence, functions and images of grandparents

### Abstract

This study examined correlations among three scales, i.e., grandparents' functions on late adolescent grandchildren, the current relationships between grandparents and grandchildren, and the images of grandparents held by grandchildren. Participants were second-year university students (N = 158, 39 men and 119 women). They were asked to choose one grandfather or grandmother who is or had been closest to them and respond to questions about their relationship with that grandparent. The typically nominated grandparent was a maternal or paternal grandmother who was alive but not living together. After the factor structure of each scale was confirmed, factor scores of the subscales of each scale were calculated. Correlational analyses showed many significant associations among them. Late adolescent university students considered less tiring and more committed relationships as well-functioning. Moreover, more guiding and caring grandparents had more positive images, whereas grandparents with tiring or conflictive relationships had less positive images. These results suggest substantial interrelationships among the functions of grandparents, the quality of the present relationship, and images of grandparents held by late-adolescent grandchildren. These results were interpreted from the perspective of relational characteristics of grandparents' function and how they influence images of grandparents held by their grandchildren.

Correspondence to : Satomi FUKUE

Master's Program in Clinical Psychology  
Graduate School of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-mail : [w5218005@kwmw.jp](mailto:w5218005@kwmw.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.29, No.1, 2019 191 – 200)